一休さんの大きな話　　京都府

あるとき、ひとりの小僧さんが一休さんに、
「この世で、いちばん大きい物はなんですか」とたずねました。一休さんは、
「よっしゃ」といって、こんな話をしました。
「北の海にな、『大こう』いう大きな鳥がおったんや。胴の大きさが千里、つばさの長さが千里やから、羽広げたら三千里や。
　あるとき、大こうは、
（いっぺん南極いうとこを見てみたいなあ）と思うて、南に向かって飛び立ったんや。昨日も飛び、今日も飛び、どこまでもどこまでも、何年も何年も飛びつづけたんやが、いっこうに南極は見えて来いひん。さすがの大こうも疲れはてて、海に浮かんだ木の枝にとまって、羽を休めたんや。そしたら、いきなり下から声がした。
『わしのヒゲにとまっとるのは何者や』
大こう、びっくりして、
『なんと。わしは、北の海に棲む大こういう鳥ですねん。いっぺん南極いうとこを見てみたいと思うてはるばる飛んできましたんや。疲れてこの枝にとまって休んどるんですが、こんな大木をヒゲやというあなたは、いったいどなたですか』いうてん。そしたら、下から、
『わしは、この南の海の底にすんでおる大えびじゃ。このわしでも南極なんぞ見たことがない。おまえみたいな小さい者が行き着けるはずがあらへん、帰れ』て、大声がしてん。大こうは、がっかりして帰って行ったんや。
　さて、大えびは、
『あんな小さい鳥でも、南極を見たいと、はるばる飛んできたんや。わしこそ、見に行かんならん』いうて、南極を指して泳ぎだしよった。昨日も泳ぎ、今日も泳ぎ、どこまでもどこまでも、何年も何年も泳ぎつづけたんやが、いっこうに南極に着かへん。さすがの大えびも疲れはてて、海に突き出てた岩穴に入って休んだんや。そしたら、いきなり空から大声がふってきた。
『わしの耳の穴に入っとんのは、何者や』
大えび、びっくりして、

『なんと。わしは、南の海にすむ大えびですねん。大こういう鳥が、いっぺん南極を見たいと飛んできて、わしのヒゲにとまりましたんや。わしこそ見に行かんならんと志を立てて泳いできましてん。疲れてこの洞穴に入って休んどるんですが、こんな大きな洞穴を耳の穴やというあなたは、いったいどなたですか』いうてん。そしたら、空から、『わしは、この海にすんでおる大亀じゃ。このわしでも南極なんぞ見たことがない。おまえみたいな小さい者(もん)が行き着けるはずがあらへん、帰れ』て、大きい声が響きわたってん。大えび、しょんぼりして帰って行ったんや。

さて、大亀は、

『あんな小さいえびでも、南極を見たいと、はるばる泳いできたんや。わしこそ、見に行かんならん』いうて、南極を指して泳ぎ出しよったそうやが、いまだに帰ってきとらんのやて。

どうや、世界て大きいやろう」

村上郁　再話

資料　『一休咄』巻之三